

無我思想

甲「仏教のいつたい眼目は何であるのか。」

乙「八万四千の法門といい、万巻の経典といい、なかなか大部のものであつて、一口に言えと言えば困るが、しかし仏教をいちばんよく代表するものは『無我』の思想信念であろう。」

甲「無我と言えば、どういうことだ。」

乙「無我の思想は仏教独得のものであつて、人間のいちばん正しい生活態度をあらわされた言葉である。無我に対する言葉は『我』であるが、我とは、我慢とか我執と言えはよくわかる。」

甲「無我と言えば、我無し、ということじゃないか。」

乙「そう………：それも言える。しかし、我無し、と言つても、お互いがここで話しているのだからね、無いことはない。」

甲「それじゃいつたいどういうことだ。」

乙「世には、われわれに靈魂というものがあるかないかということの問題にして、ある者は、万年万代太りも減りもしない靈魂というものがあると信じているし、そうでない者は、死んだら人間は消えてなくなると考えている。釈尊は初めの方を「有の見」、終りの方を「無の見」と言つて、どちらも迷える者の考えであることを説かれたのだ。」

甲「それでは、靈魂などというものはないのか。」

乙「もちろん、常一主宰と言つて永久不変の靈魂、すなわち我というものはないのだ。」

甲「そうか、それは初耳だ。しかし、なかなかわかつたことを説くものだね。ところが、仏教信者でも、魂々といつも言つておられるじゃないか。あれはどうしたことだ。」

乙「言葉というものは、いろいろな意味に使われるので、あれは、流布語と言つて、常識的に使つておられる言葉で、『こころ』というよりも、性根魂とか『たましい』とか、根性魂とか言えは強くひびくから使つておられるのだ。例をとつて言えは、『お日様が東から出た』と言つても、『そうじゃない、地球が廻つたのだ』といちいち言い張り手が無いのと同じだ。」

甲「なるほどわかつた。そこで無我についてもつと聞かしてほしい。」

乙「靈魂がないというと、『それ見ろ、人間も物質なのだ。焼いたら灰になる。脳細胞の活動が精神と言われるので、物質の一種の働きなのだよ』とこんな簡単に言つてのける、これも誤りだ。」

甲「そうするといよいよむずかしいではないか。有るんでもない、無いんでもないというように聞こえるのだが。」

乙「有ると言つたつて、君の三つ児の時は、ありやしないじゃないか。無いと言つたつて、二十五の青年が笑つておられるじゃないか。だから、あるんでもない、ないんでもないと言つておられるのじゃない。どうきめても偽りだ。」

甲「それを無我というのか。」

乙「そうだ、一切合切、天地間、ありとしあるものはすべて無我だ。だから、動かないものとしてなく、変らないものとしてない、この相を諸法無我というのだ。」

甲「諸行無常というのは、このことであるのか。」

乙「そうだ、諸行無常だ。行という字は『もの』という意味だが、物も者もものだ。こころにあるすべての物も、君もぼくも、すべて無常だ。有という考えをたたきこわし、無という考えを打ちくぐると、そこにほんとのものの相がある。それを『空』とも言うのだ。一切は空だ、すなわち一切皆空だ。」

甲「だんだんむずかしくなる。空というのは有と無とを出たことか。」

乙「そうだ、この喫つてる煙草も月も日も私も人も、このままで空なのだ。」

甲「なぜだろう。」

乙「それがすなわち、お互いの心の中にとても根強い『我』がはびこっているのだ。この『我』というやつが発展してあらゆる悪を造りはじめなのだ。我ありと執着するから、おれはおれ、きさまはきさまとなつて、そこに我利我利の根性が出て、自分だけが何もかも長い方を握つて、九百九十九人をおとしても、自分一人が浮かぼうとして、大衆が困つても、自分だけが地位や富や幸福にかじりついて離れない、いやな社会が生まれてくるのだ。だから、その『我』が人間にある間、大小の喧嘩はやまないのだ。この『我』の始末をつけることが、生きることの根本だ。」